

『哲学の探求』第二十号刊行にあたって

第二十回全国若手哲学研究者ゼミナールは、本年七月一八日～一九日に箱根で開催された。本誌はその折りの研究報告の集成である。

この「若手ゼミ」が始まって今年で二十年たったことになる。その間に社会情勢は大きな変貌をとげた。私たち若手研究者をとりかこむ状況も様変わりした。「若手ゼミ」に参加する顔ぶれもすっかり変わったはずである。それでも「若手ゼミ」が綿々と続けられてきたのは、自分たちにふりかかる不安や孤立性を払拭すべく、同じような立場にある人々との討論や交流を望む若手研究者が、いつの時代にも存在したからであろう。

「若手ゼミ」はもともと恒常的な組織ではなく、毎年そのつど参加者の総意によって翌年の開催が決定される。参加資格は三五歳以下、運営については参加者以外には一切頼らないことを旨とする。参加者はみな対等で、上下関係などない。今年は二二歳から三二歳までの若手研究者が集まって活気あふれる討論が展開された。自由な雰囲気の中、年齢の高低にとらわれず率直な議論ができるところに、「若手ゼミ」の特色がある。

大学院生の研究スタイルが個人主義化してゆく傾向は、今に始まったことではないかもしれない。だが、そうした個人主義的姿勢に対する反省が「若手ゼミ」の趣旨のひとつだったはずである。それは同時に、タコツボの研究に対する批判的反省でもあるだろう。

本誌が一人でも多くの読者の手に届き、「若手ゼミ」の輪が広がってゆくことを切望してやまない。

一九九二年九月

第二十回全国若手哲学研究者ゼミナール世話人一同